

文化の風が吹くまちちくしの

文化薫道

◆其の四十二

筑紫野に残る万葉人の心

「平成」から「令和」の時代に移り変わりました。今、話題となっている「令和」の由来は、万葉集に残る、天平2(730)年に大伴旅人邸で催されたとされる「梅花の宴」です。大宰府および九州管内の官人は、大陸渡来の「梅」を題材に歌を詠んで春の一日を楽しみました。

他にも古代都市「大宰府」のエリアには多くの万葉歌が残されており、大伴旅人や山上憶良らを中心とした、いわゆる「筑紫歌壇」が形成されていました。市内でも二日市、山口、御笠の各地区などで歌が詠まれており、大宰府官人らがそれらの場所まで出向いていたことが分かります。宴や望遊の場となっていたようです。

また、今に通じる地名が記されているものが多く、歌が詠まれたおおよその場所を知ることができなのが、本市に残された万葉歌の特徴です。

福岡県と佐賀県との県境に位置する国特別

史跡・基肄城(きいじょう)跡には、神亀5(728)年4月、都からの使いとしてやってきた式部大輔、石上堅魚



大伴旅人の歌を刻んだ文化会館の歌碑

(いそのかみかつお)朝臣の歌と大伴旅人の間で交わされた歌が残されています。この旅人の歌を刻んだ万葉歌碑が、筑紫野市文化会館の前に建てられています。

石上堅魚 来鳴き響もす 卯の花の

『万葉集』 卷8・1472番歌

大伴旅人

橋の 花散る星の 霞公鳥

『万葉集』 卷8・1473番歌

問い合わせ先／文化財課

